

ハワイ先住民運動における生命と靈性の言説

竹村初美

はじめに

本論は、現代のハワイ先住民運動において示される、先住民の靈性という観念を考察するものである。民族的マイノリティによるこの社会運動において、靈的感覺や、それとかかわる生命の感覺は、ローカルな場に結びついたものとして提示される。これらはどのように示され、どのような役割を果たしているのだろうか。⁽¹⁾

ハワイ先住民運動は、一九六〇年代末から七〇年代ころに始動した。当初これは、伝統文化の復興運動という性格が強いた。フラや音楽などの伝統的な芸能、工芸、儀礼などが、この時期に注目を浴びるようになつたのである。こうした気運は、やがて「ハワイアン・ルネサンス Hawaiian Renaissance」の名で知られるようになつていく。

文化復興運動は、急速に政治的傾向を帯びていった。一九七〇年にカラマ渓谷で生じたハワイ人農民立ち退

き反対運動が多くの参加者を集めたことが、そのきっかけと言われる。これを境に、先住民土地権への関心が急速に高まり、先住民団体が続々と結成されていった。⁽²⁾

先住民土地権の問題は、やがてハワイ人主権侵害の問題と結びついていった。先住民土地権をめぐる紛糾は、歴史的な問題でもあつたためだ。一九世紀後半に米国系の勢力が当時のハワイ王朝を「転覆」したことは、今日の土地権の問題とも深くかかわっている。主権回復問題については、現状維持派、国家内国家派、完全独立派という三様の立場が存在し、それぞれの活動を行つてゐる。

非西洋世界が資本主義や世界システムに包摂されていく過程で、民衆が在来宗教や在来の象徴体系を通して抵抗ないし受容を試みる事例は、さまざまな研究の対象となつてゐる。しかしハワイにおけるこの運動は、いわゆる土着民衆による「象徴的抵抗」のケースとは言いくらい。ハワイの場合、「民衆」によるそうした宗教的行動は、ハワイ王朝期にはいくつか見られたものの、その後もある程度のひろがりをもつて展開したものはないのである。しかも、土着の象徴体系を存続させる制度的基盤が、すでにかなりの程度失われているという歴史的な事情がある。

ハワイ先住民運動は、在来宗教の制度や現行の儀礼を利用ないし転用するというより、それを復元ないし創造するところから出発せざるをえなかつた。もはや自分たちが持たなくなつてしまつた象徴体系を、呼び戻そうとする、これは復興運動である。

アイデンティティの再定義におけるふたつの方向

この運動の眼目は、民族集団としてのアイデンティティを自己主張していくことにある。そこには、大きく分けてふたつの方向性がみられる。

いっぽうは、歴史や法律について語るという方向である。近しい過去——主に一九世紀の——の歴史が言及され、未来に向けた法の改正が訴えられる。過去の歴史の掘り起しによって、権利の主張が行われるのである。

先住民がハワイ王朝転覆にまつわる歴史に注目したのは、一九七〇年代のことであった。先住民運動の勢いが高まるなか、先住民土地権についての関心は、必然的に法律と歴史の検証へと向かったのである。彼らが過去の歴史を語るうえで、常に中心の話題となるのは、一九世紀末におけるハワイ王朝の転覆とその前後の時期である。ハワイ王朝の歴史、特にその最後の女王リリウオカラニの個人史が注目を浴び、これらについてのテクストが多く生み出された。リリウオカラニの残した自伝は、ハワイ先住民運動家の多くによつて読まれ、彼らに刺激を与えた。⁽⁴⁾

さて、本論の主題に直接かかわるのは、もう一方の方向である。すなわち、ハワイの土地と靈性について語るという方法だ。「ハワイ的靈性」(Hawaiian spirituality)は、ハワイ先住民運動において、エスニック・アイデンティティのひとつの中核として語られる。

その際、鍵概念になるのは、ハワイの大地と生命である。“aloha ‘aina”（土地への愛）や“malama ‘aina”（土地をケアすること）といったスローガンが唱えられ、土地にまつわる物語や他界觀が語られる。ハワイの土地と先住民との、靈的な交感が語られ、ハワイ人どうしの、またハワイの自然や祖靈とのオハナ‘ohana（拡大家族）的一体感が表明されるのである。オハナや靈性の観念は、ハワイ人の生命とハワイのコスモロジーとの全的な連関を説明するときにも動員される。⁽⁵⁾

以下、本論では五つの項目を設け、こうした靈性と生命の語りを論じていく。なお、本稿での作業の目的は、ハワイ先住民運動における靈性観念の特徴や役割を概念化することにあり、そのため具体的な事例の紹介を十

分に行なうことはできないだろう。とはいって、これと似た要素を持つ他の運動について今後考察を続けていくためにも、こうした概念化の作業は有用であろう、と筆者は考えている。

一 灵性の観念による断絶の跳びこし

ハワイ先住民運動は、伝統文化の復興運動である。この運動に参加する人々は、在来の象徴体系としての「民族的伝統」にアクセスを試みる。しかし、制度・慣習の喪失や文字資料の欠如といった事情から、そこにはしばしば困難がともなう。こうした困難を克服するため、彼らが活用するのが、「靈性」の観念であると言える。靈性という観念によつて、歴史的・資料的断絶の跳びこしを図るのである。この点について、しばらく見ていくことにしよう。

さて、ハワイ先住民の民族的アイデンティティについて考える際、念頭に置くべき背景事情がある。ひとつは、ハワイにおける歴史的な混血の進行であり、もうひとつは先住民の伝統文化の途絶である。言い換えれば、ハワイ先住民の生物学的出自の問題と、文化的継続性の問題である。

ハワイ先住民の混血は、西洋との接触以後急速に進み、生物学的出自としての「ハワイ人」という人種的能力ゴリは、決して自明のものではなくなつていて⁽⁶⁾。この点でハワイ人運動は、民族運動としては大きなジレンマを抱えていると言える。二〇世紀初頭からの移民流入による他民族社会化のなかで、ハワイ人は人口比率において少数派に転じていった。さらにその後の植民地化の歴史によつて、ハワイ先住民は自らの伝統文化や言語、宗教的慣習、制度の多くを失い、そこから切り離されてしまった。ハワイ文化復興運動は、在来の象徴体系としての「民族的伝統」にアクセスを試みるものだが、このような制度・慣習の喪失や文字資料の欠如とい

つた事情から、そこには困難がともなう場合も多い。

「靈性」の概念が活用されるのはここにおいてである。伝統文化の再学習者や、失われた伝統文化の再現を図る人々は、しばしば「ハワイ的靈性」の言説に依拠することで、伝統の断絶や歴史的空白の存在に対処する。靈性の観念によつて、いわば歴史的・資料的断絶の飛びこしを図るのである。

この「ハワイ的靈性」を持つための必要要件とされるのは、むろんハワイ人としての生物学的出自である。いっぽう、当人がハワイの伝統文化を継承してきたかどうかという文化的継続性の問題は、必ずしも必要条件として要求されない。結果出力されるのは、新たな文化的構築物としての「ハワイ的靈性」ということになる。生物学的出自に関する問題、つまり混血の進行という点については、問題はもうすこし複雑である。たとえば、ハワイ先住民团体カ・ラファイ・ハワイイの指導者、ミリラニ・トラスクによる次のような「ハワイ人」の定義は一見、排他的な血統主義に基づいているようにも見える。

ハワイ人である（政治的にもまた他の理由のためにも）ためには、ココ（血）を持つていなければならぬ。『心ではハワイ人だ』という考え方方に私は賛同しない。〔……〕ハワイ人であるためには、ハワイ人の血が必要だ。一度も故地で暮らしたことのないハワイ人が、本土には大勢いる。それでも彼らはハワイ人であると我々は認める。彼らはハワイ人の血を持つており、いつでも戻ってきて文化的な遺産を取り戻せる機会を持つてゐることを、我々は認める。こうしたものを回復するのに歳をとりすぎているということはないのだ。

この発言はたしかに「血」の論理を用いて、生物学的定義の枠組みから外れてしまふ人を排除するもので

ある⁽⁸⁾。ただ、彼女のこうしたハワイ人定義を、「血」と「文化」の一項対立図式でとらえることは適切ではない。ハワイ先住民のアイデンティティについて、三つの枠組みを捉える必要がある。すなわち、(A)生物学的出自(血)、(B)文化の継続性、(C)政治的対抗のなかでの文化の再創造、である。⁽⁹⁾

彼女の発言は、文化の継続性(B)から排除されてしまった人々に対してさしのべる手だと言える。文化的継続性から、歴史的にだけでなく地理的にも排除されてしまった本土のハワイ人を、彼女はふたたび呼び返す。故郷を離れ、ハワイという場所から切り離されてしまっていても、ハワイ人の血を持っている限り、文化的遺産を取り戻し、回復することができる——というのである。ハワイ先住民としての血、生物学的出自が、ここではハワイ的靈性の存在を保証する。

さらに言えば、「ハワイ人であること」の条件を生物学的出自に求めるからといって、それがただちにハワイ人の定義を狭めようとしていることにはならない。その点は、彼女の率いるカ・ラファイによるハワイ人の血統定義が、実は非常に緩やかなものであることからもうかがえる。カ・ラファイによれば、ハワイ人とは、「いかなる量であってもハワイ人の血を持つ者」⁽¹⁰⁾である。遠い昔の祖先の一滴の血が、「ハワイ的靈性」の復活可能性を保証するのだ。「対抗のなかでの文化の再創造」(C)によってアイデンティティが獲得されるという可能性が、ここで留保される。

二 精神性の観念に基づく権利主張

自覚においても、歴史的経緯によつても、「非西洋」に属す人々がいる。彼らは、グローバル化により、すでに世界システムのうちに包摂されている。このシステムは、理念のうえでは近代的諸価値——権利の保障や平等など——を共有している。だが、歴史上の事実としては、それは彼らには公正に配分されてこなかつた。

そこで彼らは、それを要求し始める。ハワイ人運動もまた、近代の「理念」を採用し、「権利」という近代的価値の公平な配分を要求する運動のひとつである。そしてその実現を阻む近代の「歴史」、すなわち西洋中心主義と植民地化を批判するのである。

この際、正統性の根拠として彼らが言及するのは国連や国際法であり、またそれらに照らしての、ハワイ王朝転覆という歴史の不当さである。ただし、それだけではない。彼らは、「靈性」という、一見前近代的な論理にも依拠し、そうすることで、反「西洋」の立場を主張する。結果、外形的には反近代的な主張が生みだされることになる。

ハワイ先住民運動は、世界的なマイノリティ運動の盛り上がりのなかで生じた。前述のようにこれは、一九六〇年代末に文化復興運動として興った運動であるが、この背景にはあきらかに同時代の他地域における思潮からの影響が認められる。七〇年代は、先住民運動が国際的な展開を遂げた時期でもあり、運動家らのライフルストリーにも、それをうかがえる例が多々見出せる。ハワイ先住民運動をひきいた、あるいはひきいている指導者には、一九七〇年代当時に青年期をすごした者も多く、こうした政治的空気からの強い影響が見られる。

政治学者スチュワート・ファースは、太平洋島嶼部の先住民による主権運動が、総じて「数」の民主主義ではなく「権利」の民主主義に基づいていることを指摘する。⁽¹⁾ この点は、ハワイ先住民運動にも当てはまる。ハワイ先住民は、ハワイ州において、人口的には少数派である。そのため、数の支配に基づく代表制民主主義の下では不利な立場に陥ってしまう。したがって彼らは、「平等」よりも「権利」を軸とした民主主義を前面に出していくことになる。このとき、土地権と並んで、かれらの権利主張の焦点をかたちづくるのが、宗教的権利の主張である。

たとえば、一九七六年、「カホオラウエ島を守るオハナ」(Protect Kaho'olawe 'Ohana) は、遺跡保護と宗教

的自由の保障を定めた合衆国 の法を根拠に、海軍を相手取つて訴訟を起¹²⁾した。同島の宗教的価値を強調し、考古学資源保護法 (Archaeological Resources Protection Act of 1979, ARPA) の遵守を要求したのである。一九八〇年の判決により、同島への宗教、文化、教育・学術上の目的での渡航が認められた。¹³⁾彼らはこの島をハワイの 主要神の一柱であるカナロアに捧げられた地であるとし、「避難の場所、靈的な再生の場所」「カナカ・マオリ（ハワイ人）が行動し、身を清め、反省し、土地や水とつながる場所」だとする。

彼らはこのように「靈性」を前面に出し、先住民の宗教的権利をもとに諸権利を主張する。宗教的自由権を 焦点に運動を編成していくのである。政治的抵抗と文化復興運動とを結びつける補助線が、こうしてできあが つっていく。

三 精神性の観念による差異化

ハワイ人の感じ方は「西洋人とは」異なる。ハワイ人による風の感じ方は異なる。ハワイ人は土地と海と に家族のように関わり、西洋人には知られていないそれらとの絆を経験する。「……」ハワイ人は寒さを感じた時よりも、むしろスピリチュアルな存在を感じた時にこそ「鳥肌」を立てる。違いを挙げていけばきり がない。これらの深い差異は、島に住むことで数世代に渡り選択的に獲得され、根づいていった性質である。¹⁴⁾

ハワイ先住民運動家によつて書かれたこの文章では、「靈的に豊かな先住民／近代合理主義に基づく支配的 社会の靈的な貧しさ」という二分法が用いられている。

テッサ・モ里斯・鈴木によれば、ナショナリズムは、近代の普遍的フォーマットを採用する一方で、自集団 と外部との差異化を図るものである。¹⁵⁾この例では、ハワイ社会においてドミナントな存在である「西洋」的な

文化と、ハワイ文化や民族とが対比されている。「西洋」と自文化とのこうした二分法は、他者（支配的文化）という鏡に即して自己像をつくる作業と言え、そこに「靈性」や「生命」の言説が生じて、ハワイ的な属性だとされていくのである。

この例のようにハワイ先住民が持つハワイ的靈性について語ることにより、先住民は他とは異なる存在として提示される。土地とハワイ人との靈的交感を語ることは、先住民を、この土地における特別な存在として際立たせ、特権化する。

四 精神性の分野横断的性格

ハワイ先住民の政治的な権利要求運動は、同じくハワイ先住民によつて行われる、さまざまな運動と境を接している。生活改善運動や、文化復興運動、環境保護運動、フェミニズムなどとである。こうした諸々の運動は、それぞれ互いに連動している。そしてこれらを結びつける、いわば扇の要としての役割を果たしているのが、靈性の観念であり、ここには、靈性や宗教一般の持つ、分野横断的性格が作用している。

前述のようにハワイ人運動は、元来文化復興運動から生じたものであるため、ハワイ先住民による政治運動と文化復興運動との結びつきは強い。たとえば、ハワイアン・ルネサンス以降のフラ・ハラウ（フラの指導者であるクム・フラとその生徒たちからなる各組織）は、ハワイの政治運動の有力な拠点のひとつになつてゐる。¹⁶⁾
 実際、ハワイ先住民運動家のハウナニ・ケイ・トラスクは、文化ナショナリズムを、脱植民地化戦略の重要な一角を担うものと見なしている。「帝国主義勢力はまず文化的ヘゴモニーの掌握を図ろうとする。したがつて、文化ナショナリズムは先住民の脱植民地化運動において非常に重要な戦略となる」と彼女は述べる。彼女によれば、ハワイの「マナ」は、アメリカ的な個人主義に対抗するハワイ的価値を形成するものである。この

マナは、政治的行動だけでなく文化的行動によつても増幅される。したがつて、フラーを踊つてマナを増幅させることは、政治的なエンパワーメントにもなるのだといふ。⁽¹⁸⁾

ここでは、フラーと政治活動という別個の活動が、宗教的観念によつて統一されようとしている。マナというハワイ的な靈性の觀念はここで、文化と政治という双方の領域に共通する本質とされ、両者をつなぐ。そして、両者間の運動が積極的に図られるのである。同様のことは、フラーやメレ（歌唱）、工芸、カヌー航海といった諸分野での伝統復興運動にも見られる。これらの活動に携わる人はしばしば、彼らの活動の本質にハワイ的靈性が関わっているという旨のことを述べるのである。⁽¹⁹⁾

こうした点には、宗教や靈性が一般的に持つ、分野横断的な性質の動きを見ることができると言えよう。多面的な社会経験が、たとえばマナといった靈的な觀念により、統一性を与えられるのだ。ここにおいて非制度的な宗教性、つまり靈性が、民族運動と、社会運動とに結びつく。

こうした「先住民の靈性」という觀念は、第一世界の「オルタナティブ」運動（文化的環境主義や文化的フエミニズム）と思想的に連続性を持つている。ハワイ先住民運動には、この時期主に高学歴層の人々によつて共有された世界的な潮流——近代の諸前提への全面的懷疑——に応じる部分が多い。この運動は、近代性への疑惑を表明する第一世界の運動と、歴史的に歩調を合わせて出現したのである。ロジャード・キーディングによれば、太平洋島嶼部の先住民運動における、理想化された植民地化以前の過去の描写には、西洋における他者概念も関わっている。宇宙の力や環境と調和して生きるエコロジー的な賢人といった祖先像は、西洋人の想像の產物であり、第三・第四世界の文化ナショナリストの諸グループの間で横断的にイデオロギーの生産と拡大が行われている、と彼は説く。⁽²⁰⁾

ハワイ人運動もまた、近代合理主義の靈的な貧しさを批判する、反近代主義の側面を有している。彼らは合

理性や技術に対する批判を行い、個人主義（近代的主体）の解体を唱え、アトム的個人觀に対し“unity”を強調する。そして、これをもたらすハワイ先住民の自然に対する感受性や、「アニミズム」を礼賛するのである。

合衆国における他の民族的マイノリティ運動や環境主義運動から先住民運動を際だたせ、特色づけているのは、これらの運動が持つ、他界觀や土地にまつわる「物語」といった、文化的資源である。先住民運動は、彼らが生きてきた個々の土地にまつわる「物語」を、在來の象徴体系のなかから動員できる。したがつて先住民ナショナリズムは、必ず具体的な場所をシンボルに持ち、その場所は、そこによつた物語・神話を持つ。その土地の本来の住人であるという自負を持つ先住民であるからこそ、「文化資源のストック」⁽²²⁾から、場所性に根ざした物語をつくり生み出すことが出来るのである。他界觀や土地の物語といった文化資源を利用するこ⁽²³⁾とにより、彼らは場所性に基づく運動を展開する。時には、物語自体が創造されることもある。

ハワイ人の生命が、土地と結びついているという主張は、運動家の多くに共通して見られる。生命の源である土地の環境に対する意識は土地権運動につながり、土地権の回復運動は主権の要求運動へとつながる。そしてそれぞれの運動をむすびつけていいるのが、ハワイ生命の生命を支える靈性、という觀念である。⁽²⁴⁾タロイも畑が広がる農村での生活は、「オハナ」（拡大家族）的な価値の具象化として語られ、伝統的な農業生活への帰還は、しばしば、倫理的、精神的な復活の手段と見なされる。実際、地方周縁部に残る農村部は、先住民の文化的シンボルとなつており、タロイもを耕作する小共同体を人為的につくつてゐる人々もいる。影響範囲は限られ、広い範囲にインパクトをもたらすことはなかつたものの、一九三〇年代に George Mossman という人物⁽²⁵⁾がひらいた共同体や、一九五〇年代に Malia Solomon が經營していた共同体はその先駆的な例である。⁽²⁶⁾現在もオアフ島ワイアナエのマカハ地域には、伝統的な農耕生活を実践するマカハ地域開発運動を行う人々がいる。

彼らはここで、農耕作業を行うとともに、伝統的なハワイ文化についての教育活動にも従事している。伝統的で健康的なハワイ食をとりもどそうという食生活改善運動、ハワイ人権利運動、平和運動、ハワイ文化の教育など、彼らの多岐にわたる活動は、すべて「土地」を基盤にしている。⁽²⁷⁾

このような土地の靈性という観念については環境主義の世界的拡大という文脈を抑えておく必要がある。特に⁽²⁸⁾には、八〇年代の環境思想における動向が関係している。この時期には、それまでのようない原生自然(wilderness)としての自然から、人の手が加わった自然へと目が向けられるようになった。その結果、国際社会において、先住民の生業活動や伝統のうちに保持されているとされる、いわゆる「環境知」について、しばしば言及されるようになった。

先住民運動は、ローカルな場所性と民族の生物学的出自とに規定されているにもかかわらず、こうした点において、ある種の世界性を持つた文化運動になりうる契機を潜在させている。近代的価値の行き詰まりが指摘されるなかで代替的な価値を探求する運動と、民族的「根元」を探求する動きとが結合したものと言えるのが、この種の運動なのである。

靈性観念は、世界各地の先住民による国際的な連帯活動の場にも登場している。

一九七〇年代以降、世界各地の先住民族が一同に会し、それぞれの伝統的な儀礼や宗教観を語る場が、しばしば持たれるようになつた。一九七〇年代初頭にカナダを発信地として国際的な先住民運動が興り、先住民による国際会議などが度々開催されるようになつたのである。ハワイからPoka Laemuiなどが、当初からこうした会議に参加している。

こうした動きはやがて制度的な場を獲得した。一九八二年、国連に「先住民に関する作業部会」が設置され、一九九三年は、国連先住民年に指定されたのである。こうした場では、しばしば、一種の「宗教問対話」とも

言うべき作業が行われる。諸先住民族集団の宗教觀に、共通項を發見する作業がなされるのである。大地への信仰という点でわれわれは共通する、といった類の連帶の言説は、こうした場でつくられる。ここ三〇年ほどあいだに「先住民の靈性」というカテゴリーが、彼ら自身によつて形成されつゝあり、「先住民靈性の大文字化」の可能性とも言うべきものが確認できる。

こうした展開の背景には、第二次大戦以降、人々の宗教觀に生じた、ふたつの変化が影響していると思われる。ひとつは、進化論的な宗教觀の衰退である。ある時期より先住民の信仰は、かつてのように「未開」の劣つたものとして、不当におとしめられるものではなくなつていく。先住民の側でも、自らの宗教傳統を威信の源泉と見なすようになる。

もうひとつは、世界システムに包摂された人々——ここでは先住民——の側で、制度としての「宗教」の受容が完了したことである。先住民運動の言説において、彼等の伝統的な信仰は、しばしばキリスト教などの「神教」へのオルタナティブとして「多神教」「アニミズム」として提示される。そのこと 자체、いわば中身をおさめるべき箱としての「宗教」というシステム・概念を、彼らが受容したことを物語つてゐる。彼らは、「宗教」という共有のシステムを受容し、自らの「宗教性」を再帰的に見なおそとするのである。

五 精神性の自覺による個人のアイデンティティ獲得

「靈性」という観念は、こうした運動に一定の戦略的効果をもたらしている。しかし、マイノリティによる、いわゆる「本質主義」的な主張を、政治戦略としてのみとらえることは慎まれるべきである。「オルタナティブ」運動の多くがそうであるように、ハワイ先住民運動もまた、それに参加する個人に、内面的変革を要求する。運動に参加することによって、個人は、私的領域においても、アイデンティティの係留点を得るのである。

他のオルタナティブ運動とこの運動の違いは、この運動においてはその係留点がエスニックなものであることだ。人々は、ハワイ人としての自らのアイデンティティを新たに意味づけ、その再定義を図る。これはしばしば、「ハワイ的靈性」の自覚による変革というかたちをとる。個人は文化活動や政治活動を通して、ハワイ的コスモロジーへの帰属を確認するのである。

こうしたことの結果、運動への参加は、個人の人生史・精神史にとつても画期的な出来事となる。それとともに、参加者の関心は、ハワイ先住民を取り巻く社会的環境という公的領域にも向けられていく。⁽²⁹⁾ここでは、公的領域と私的領域が相互に乗り入れているさまを見てとることができる。⁽³⁰⁾

ひとつだけ例を挙げよう。フレンド派のキリスト教会に属し、ハワイ女性のためのグループ活動を率いるホオピオ・ドゥカムブラ Ho'opio Decambra⁽³¹⁾は、一九七〇年代末、三〇代のときにメリノール修道会のシステムが主催する解放の神学系の聖書勉強会に入った。彼女にとってはこのことが、ハワイ性に目覚めるきっかけとなつた。勉強会には「民族的マイノリティや女性を尊敬する人々」が多く集まっていた。ドゥカムブラはここで、女性として、またハワイ人としての自覚をえる。

やがて彼女は、詩人兼作家のある人物に依頼し、自らを含めたハワイ人女性グループに、作文指導を授けてもらつた。「ハワイ人は文章を書くことができない」というステигマを克服するためである。書くことを学ぶなかで、「自分なりのハワイ的思考が生じてきた」と彼女は言う。彼女はハワイ人としての意識を短詩にして、他の参加者たちもハワイ性をテーマに文章を書き始めた。

書くうちに、ハワイ人であるとはどういうことがという意識がわきあがつてきた。もつとたくさん書き、読んで、そして他の人々に話さなければならぬ、と悟つた。自分自身についての意識が立ちあらわれて

くるこの時に、われわれが誰であるのか、わかつてもらうために。⁽³²⁾

ここで彼女の言う「ハワイ性」は、文化的な継続性、すなはち伝統による裏づけをまったく欠いている。外形のみを見れば、彼女は英語での詩作を始めたにすぎず、ハワイ語を学び始めたわけでもなければ、フラやメレを学び始めたわけでもない。また、この勉強会に参加するまでは、彼女は自らの血統的出自にも無関心であった。ドゥカムブラが行っているのは、独特な「ハワイ性」解釈であり、彼女なりのハワイ性の構築である。ここには、「私的宗教」（ルツクマン）にも通ずるものを見出せる。このようなハワイ的アイデンティティは、政治的対抗のなかで後天的に獲得されたものと言える。

支配文化という他者への対抗のなかに生じてくるハワイ性の自覚は、運動に参加する個人の人生史においても重要な契機となる。語ること（作文を書くこと）を始めた彼女はここで、民族の物語のなかに、個人的なアイデンティティの係留点を見つけ出す。公と私がここで乗り入れる。こうして彼女の活動は、世俗と宗教の領域、個人と公の領域をまたがることになる。

結語

以上、エスニシティに根拠をおく社会運動において、「靈性」という観念がどのように作用しているかを、概略としてではあるが見渡してきた。ここまでをまとめておこう。

ハワイ先住民運動において、「ハワイ的靈性」の觀念は、（1）生物学的出自の、また文化的な継続性の面での「斷絶」を飛びこすことを可能にさせる。この靈性の觀念に基づき、（2）マイノリティ集団の権利の主張が行われる。こうした靈性の觀念は、（3）ハワイ先住民を他の民族集団から差異化するはたらきを持つ。靈性の

観念によって、彼らはハワイという固有の土地における先住民の靈的な特別さを主張するのである。また靈性は（4）分野を横断する性格を持ち、政治と文化復興、あるいは健康問題などの生活にかかる諸問題や、環境運動などを橋渡しする。さらに、（5）運動に参加する個人は、民族的靈性を自覺することと、個人としても変容をこうむり、あらたなアイデンティティを構築していく。

ハワイ先住民運動において、靈性とは、土地に根ざした生命と結びつくために不可欠なにかとして語られる。大地に結びつくこと、すなわち起源への回帰を、彼らは求める。こうした原初的一体性への憧憬、つまり母胎へのあこがれは、おそらく人間の普遍的な志向性であつて、ナショナリズムにも、宗教にも、共有される。先住民の政治的対抗運動のなかで構築されるアイデンティティは、他のナショナリズムにおけるそれよりも、より直截にそのことを示していると筆者は考える。

- (1) 宗教学の分野でふつう「靈性」といえば、制度的形態をとらない宗教性を意味する、分析上の概念をさす。これは未だその内容について合意がなされていない用語であり、しばしば論争の的になるものである。「靈性」ということばを用いてある現象を読み解くとするならば、「ではその『靈性』とはそもそもいつたい何をさすのか」という議論への参加を求められよう。だが、筆者がこの用ひている、「靈性」とか「ハワイ的靈性」とかいつた言葉は、そうした研究上の分析概念としての「靈性」とは別個のものであつて、あくまでも、彼ら自身が使つてゐることばとしての“spirituality”や“Hawaiian spirituality”的訳であるところを明示しておきたい。
- (2) 初期の政治団体としては、カラマ溪谷問題の支援団体を母体として結成された「コクア・ハワイ」Kokua Hawaii（一九七一年設立）、「ハワイ議会」Congress of Hawai'i（一九七一年）、「アロハ」ALOHA, Aboriginal Lands of Hawaiian Ancestry（一九七一年）など挙げられる。（Tachibana, Chieko. "Hawaiian Sovereignty,"

Contemporary Pacific 6 (1994): 202-209.; Dudley, Michael Kioni, and Keoni Kealoha Agard. *A Call for Hawaiian Sovereignty*. Honolulu: Na Kane o ka Malo, 1990.

(3) *辺境散發的に生つたるの種の現象にハワイ* Kent, Noel J.. *Hawaii: Islands under the Influence*. Honolulu: Hawaii UP, 1993. 33-34.

(4) たゞハバダ、先の註に挙げた A.L.O.H.A. の設立者であるルイサ・リーハ・ラウオカラニ女士の自伝を読んでいたりを挙げておきたい。この本を読んだりする、設立の前年である一九七一年にアラスカ先住民徒住要求法案が通過したたりが、彼女を刺激したのである。(Dudley, Michael Kioni, and Keoni Kealoha Agard. *A Call for Hawaiian Sovereignty*. Honolulu: Na Kane o ka Malo, 1990. 109) 同様に、著名なハワイ人運動家であるケイド・バー・ハベ(ボカ・ラヌマヘ) Hayden Burgess, Poka Laenui も、一九六九年、彼が青年期にあひたゞめに同書を読んでいたりしたが、ハワイ先住民の問題に目覚めやがれからうつになつたと述べてゐる。(Mast, Robert H., and Anne B. Mast. *Autobiography of Protest in Hawai'i*. Honolulu: U of Hawaii P, 1996. 409)

(5) たゞハバダ Kelly, Marion. "Hawaiian Sovereignty: Myths and Realities." Hilo, HI: Ka Lahui Hawaii, 1992; Trask, Haunani-Kay. *From a Native Daughter*. Monroe, MA: Common Courage, 1993. ひと層べく多くの権利や政治以上の現実的な発展へ、ハワイ的な靈性や生命觀についての詩的な語りは、一筆しき回題であるのである。たゞ法律と政治の問題を語るその人物が、同じ話の流れのなかで、ハワイ的な靈性や生命觀を語るのである。たゞえば、かつて拙論でとりあげたあるハワイ独立論者は、国連憲章や法律文書に言及してハワイ人の主権回復を主張するにせよ、創世神話を語り、ハワイ的生命觀について、靈性的なシジョハを述べる。(「ハワイ先住民運動における神秘的祈福——近代的条件に依拠した反近代主義——」東京大学宗教学年報第110号 110-111年、145頁)

(6) 具体的數値について Fu, Xuanning. "Interracial Marriage and Status Exchange: A Study of Pacific Islanders in Hawai'i from 1983 to 1994." *Pacific Studies* 22 (1999): 51-71 & http://www.census.gov/Press-Release/www/2001/tables/redist_hi.html; Internet; accessed 25 November, 2003. たゞ、1ページ長たゞ10ページ前半までの人口の推移について Stannard, David E.. *Before the Horror: The Population of Hawai'i on the Eve of*

Western Contact. Honolulu: Hawai'i UP, 1988.

(7) The American Friends Service Committee. (Ed.) *He Alo A He Alo, Face to Face: Hawaiian Voices on Sovereignty*. Honolulu: The Hawaii Area Office of the American Friends Service Committee. 113-114.

(8) ハワイの「自」の繪畫せ、ハワイにねむる他のハベリック集団への牽制の意味あふと思われる。彼女の妹や、カ・ハヘイの指導者である、ハナリ・ケイ・トハスクは、アシア系移民を祖先に持つ人々の「移民の植民地主義」 Settler Colonialism を批判する。これは日本などアシアからの移民を祖先に持つ人々の間に浸透しているアイデンティティの様態である。島のアイデンティティを、祖先の出身地や自身の生物学的な出自であるアジアに求めるのではなく、ハワイの住人であるといふに置こうとするものであり、一九七〇年代に結成された文学団体、Bamboo Ridge を中心とした文学運動の理論として知られてくる。だがトハスクは、「彼らは決してハワイのローカルではない」とする。他民族集団に対するいわした排他的態度が、一九八〇年代以降のハワイ人運動の孤立を招いた感は否めない。

だがこへきうで留意すべしは、彼女が次のような場合には、ハワイ人の血統的定義を否定しているのである。州政府は、「ハワイ人宅地委託法」として法律の適用に際して、五〇%以上のハワイ人血統を持つ者のみを「ハワイ人」と定義している。彼女はそれを、ハワイ先住民の人種的分断だと批判するのである。(Trask, Haunani-Kay. "Settlers of Color and 'Immigrant' Hegemony: 'Locals in Hawai'i'." *Amerasia Journal* 26 (2000): 1-24.)

(9) 田 松口利夫 「歴史から抵抗へ——トモコヒラの生前の展開」 青木保也編『東波講座人類学12 映像化されぬ歴史』 東波書店、一九九六年 1111—1121頁。

(10) Ka Lahui Hawaii. *Ho'okupu a Ku Lahi Hawaii: The Master Plan*. Hilo, HI: Ka Lahui Hawaii, 1993. 7.

(11) Firth, Stewart. "Decolonization." *Remembrance of Pacific Past*. Ed. Borofsky, Robert. Honolulu: Hawai'i UP, 2000. 314-332.

(12) "the State of Hawai'i Kano'olawe Island Reserve Commission.", <http://www.state.hi.us/main/home.htm>; Internet; accessed November 25, 2003.

(13) "Kaho'olawe Healing.", <http://www.brouohana.net/ohana/aha.pdf>; Internet; accessed November 25, 2003.

(14) Dudley, Michael Kioni, and Keoni Kealoha Agard. *A Call for Hawaiian Sovereignty*. Honolulu: Na Kane o ka

Malo, 1990, 79.

- (15) 鈴木、ナッシュ・モーリス（大川正彦訳）『辺境から眺める——アイヌが経験する近代』みすゞ書房、1990〇〇年、一八四頁。なお、一九世紀にハワイ王朝が主導した復興主義ナショナリズムは、おもにいじらした文脈の上にあつた。「文明」という共通フォーマットの積極的採用と、「国民文化」の創出による外部との差異化が行われたのである。どうわけカラカウア王（David Kalākaua, 在位一八七四—九一）の主導によればが重要である。王は、ハワイ王国の国民国家化に熱心であった。多額の予算を講じて近代的な西洋建築を導入するなど、伝統儀礼の復興を奨励した。
- (16) Buck, Elizabeth. *Paradise Remade: The Politics of Culture and History in Hawai'i*. Philadelphia: Temple UP, 1993. 8
- (17) Trask, Haunani-Kay. *From a Native Daughter*. Monroe, MA: Common Courage, 1993. 52.
- (18) ibid. 111-130.
- (19) たゞばばハラに「こゝせ、藤井桂子『ハワイ諸島「フアワールド」の現状』」「伝統文化の継承」——ハラの担当「ハラの考察——」（明治大学大学院政治経済学研究科政治学専攻1990-1年度学位修士請求論文）を参照。
- (20) の論文におれぬふれじるヌクム・ハラ（ハラの指導者）やハラ学習者への詳細なインタビューカー記録には、ハラの実践者が「ハワイ的靈性」や「生命」について觸及してこる例が多数見られる。
- (21) Beyer, Peter. *Religion and Globalization*. London: Sage, 1994. 102-105.
- (22) Keesing, Roger. "Creating the Past: Custom and Identity in the Contemporary Pacific." *Contemporary Pacific* 1-2 (1989) : 29-30.
- (23) 伊藤雅之「宗教・宗教性・靈性——文化資源の当事者性に着目——」 国際宗教研究所編『現代宗教 2001』廣済堂、1100-1年 四九—六五頁。
- たゞばば、先の註で述べたProject Kahoolawe 'Ohana が、この無人島を、汎ハワイ的な「聖地」へ創造しなおや。これについてば、拙論「現代の先住民運動と聖地——ハワイ先住民とカホオラウヒ島」（国際宗教研究所リバースンター）〔八九、1100-11年四月、四一九頁〕を参照められた。
- 歴史的に見た場合のその構築性ば、主に人類学者にむけに指摘められてゐた。たゞばば、Keesing, Roger. "Creating the Past: Custom and Identity in the Contemporary Pacific." *Contemporary Pacific* 1-2 (1989) : 19-42. &

- Linnekin, Jocelyn. "Defining Tradition: Variations on the Hawaiian Identity." *American Ethnologist* 10 (1983): 241-252. ただしおれの場合は、やうした文化的構築を批判するのではなく、政治的に有効なやり方として評価しているようと思われる。ただ、そのように指摘すること自体もまた、運動の当事者にとって不利益をもたらすのだと云ふことは、かつてフランス・ファン・ファンとサルトルの間で生じた摩擦が証明している。この論争については、たとえば松田素一「文化・歴史・ナウティア——ネグリチュードの彼方の人類学」(『現代思想』11号、一九九八年、二〇六—二二七頁)などを参照された。また、彼らとハワイ先住民運動家ハウナリ＝ケイ・トロスクとのあいだに行われた論争については、Tobbin, Jeffrey. "Cultural Construction and Native Nationalism: Report from the Hawaiian Front." *Asia/Pacific as Space of Cultural Production*. Eds. Rob Wilson and Arif Dirlik. Durham: Duke UP, 1995. 147-169を参照。
- (24) 生命や靈性についての語りを通して、ハワイの環境や先住民の保健問題を、主権の問題に結びつけるいふある。具体的な例についてば、拙論「ハワイ先住民運動における神祕的言説——近代的条件に依拠した反近代主義——」東京大学宗教学年報第二〇号(一〇〇二年、一四四—一四七頁などを参照された)。いわば、ハワイ先住民の健康とハワイは、ハワイの土地や環境の問題、文化的問題と、しばしば自覺的に結びつけられる。靈性や生命による分野の橋渡しが、いわゆる行われてゐる。
- (25) Linnekin, Jocelyn. *Children of the Land: Exchange and Status in a Hawaiian Community*. New Brunswick: Rutgers UP, 1985.
- (26) Kanahole, George. "Ha'ilio Mele" Newsletter May, 1979. The Hawaiian Music Federation.
- (27) ルイ・カキオ・ヒラック・ハノベ・アーナー・バーシックスなどによる運動。一九九一年一二月七日の真珠湾攻撃五〇周年記念には、「真珠湾五〇年の和解と平和のため」のホオ・ボノボノ(和解)の儀式を行う(バージェス、アーナー「ハワイ先住民が語る真珠湾五十年」「ちようち」部落解放)四六号、一九九二年三月六四—七二頁、領家櫻「ハワイで考え方せられたこと(上)(下)」「ちようち」部落解放)四六号(一九九二年三月)、七七八二頁、四七号(一九九二年六月)一一九—一一四頁)。また同農場は、公立学校の子供たちに農業実習とハワイ食指導を行つてゐるのも知られる。(古橋政子「ワイアナエ・ダイエット——ハワイ先住民の文化再生と食生活改善運動」『食文化助成研究の報告11』一〇〇一年九七—一〇四頁)

(28) Milton, Kay. *Environmentalism and Cultural Theory: Exploring the Role of Anthropology in Environmentalism Discourse*. New York: Routledge, 1996. ベリーペッパー、「ト・ハ・ヒ・ハ・タ・ス」(一九九一年)、第116章では、次のよう

先住民の環境知に言及する。「先住民の土地は歴史的関係を持ち、一般にその土地の元々の住民の子孫である。[……]彼らは何世代にもわたって、彼らの土地、資源、環境に関する全体的な伝統的科学的知見を培つて来た」(“Chapter 26: Recognizing and Strengthening the Role of Indigenous People and Their Communities.” Agenda 21, <http://www.un.org/esa/sustdev/documents/agenda21/english/agenda21chapter26.htm>; Internet; accessed November 25, 2003)。やがて、””ネー、へや細川弘明の指摘する所へど、先住民の生業活動の伝統は、精神的な救済の可能性をも視出す、リードハイジヤー、環境主義者も存在する。(細川弘明「ハワイシズムの聖者か、マキヤベリストとの同床異夢か——先住民族と環境主義の切り結ぶり」)「現代思想」11六一六号、一九九八年、116—116(三頁)。

(29) 筆者はハワイ人運動が示す、いわした性質をもつて、ホセ・カサノヴァの見解への反証とした。 (カサノヴァ、ホセ (津寛文訳) 「近代世界の公共宗教」 玉川大学出版、一九九七年、一一一頁) 彼は、「私的宗教」(ルックマン)は公共領域に関与しないと見るが、筆者は、うは考へない。ハワイ先住民運動のようなケースでは、個人が独自の靈性解釈を行つことがままあり、この点で「私的宗教」的な側面を持つ。だが、同時にこの運動は、公共領域への関心を失わない。たとえば、次のよな例。

ハワイ先住民運動に关心を持つあるハワイ先住民運動女性は、自らの「ハワイ的靈性」は、次の三つのから成るとしている。「アロハ(Aloha)、アガペ(Agape)、アヒンサー(Ahimsa)」である。「A」である。彼女は自らのキリスト教信仰と、傾倒するガンドイーの教えを、ハワイ的靈性の一部であれとしらべる。(DeCambre, Ho'opio, "Activism is Empowerment." *Hawai'i Journeys in Nonviolence : Autobiographical Reflections*. Eds. Paige, Glenn and Lou Ann Ha'aheo Guanston. Honolulu, HI : Center for Global Nonviolence Planning Project, Matsunaga Institute for Peace, University of Hawaii, 1995. 1-22.) 個人的解釈をもつて、「私的宗教」的な性格を、リードハワイ人問題どころの領域に結ぶつてゐる。

文化的な環境主義(かつてのいわゆるキヤンバース・ラティカルズによるそれ)やフューリーズムなど、こわゆる「オルタナティヴ」運動にも、同様のことが言ふ。これは公共領域の変革を目指す社会運動であるが、

同時にその参加者に、ある種の内的変革を要求するものもある。

- (30) 「」の点については、アルベルト・マルツチの「新しい社会運動」の概念に依拠している。(マルツチ、アルベルト(山之内靖、貴堂嘉之、宮崎かすみ訳)『現在に生きる遊牧民(ノマド)——新しい公共空間の創出に向けて——』岩波書店、一九九七年)先住民運動は、民族的な「血」の観念を利用する。個人は民族性という足がかりを得て、靈性や生命にかかる説を生産する。」これによれば、現代の「複合社会」(マルツチ)に生きる寄る辺ない個人は救い出される。人々は中心的価値(環境、生命)を、周縁(ハワイ)からローカルな場)においてめぐらすのである。
- (31) Mast, Robert H., and Anne B. Mast. *Autobiography of Protest in Hawaii*. Honolulu: Hawaii UP, 1996. 257-258.
- (32) ibid. 258.
- (33) Cf. Taylor, Mark C.. *About Religion: Economies of Faith in Virtual Culture*. Chicago; Chicago UP, 1999. 65-79.

(たけむら・はつみ 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)

The Discourses on Spirituality in the Indigenous Hawaiian People's Movement.

Hatsumi Takemura

This paper explains the idea of “spirituality” or “Hawaiian spirituality,” which are expressed by the people involved in the Indigenous People’s movement in Hawaii since around the early 1970s. We will consider this under the following five viewpoints.

- (1) Jumping over Gaps by Developing the Idea of Spirituality: The people involved in the movement seek access to their ethnic tradition, but they are faced with difficulty because of loss of the old customs and lack of historical materials written by their ancestors. In order to overcome these difficulties, they have established the idea of “spirituality.” Then they have been attempting to jump over the historical and informational gaps, using this conception.
- (2) Claiming One’s Rights by Developing the Idea of Spirituality: The people belonging to the “non-Western World” both through their self-consciousness and through historical backgrounds have already been within the world system established in the course of globalization. Everyone within this system is supposed to share the idea of modern values, such as rights and equality. Historically speaking, the fact is that these values have not been fairly distributed among them. Therefore, they eventually began claiming them. In the process, they have set up the idea of “spirituality,” which seems to be pre-modern at a glance. By doing so, they assume themselves anti-West.
- (3) Differentiating Themselves from Others by Developing the Idea of Spirituality: Nationalism, on one hand, adopts the universal modern format, and on the other hand, aims to differentiate one’s own group from others (Thessa M. Suzuki). In the Hawaiian indigenous people’s

movement, they put emphasis on their own spiritual relationship between them and the Hawaiian land. They display an image of the indigenous people through making discourses on the Hawaiian spirituality which they say belong only to them. This idea makes them stand out as spiritually privileged people on the Hawaiian islands.

- (4) Character of the Idea of Spirituality Applicable across Every Social Function: Rights-claiming movements by indigenous Hawaiians are closely connected with other Hawaiian's local movements, such as life-improvement movements, cultural revivalism, environmentalism, feminism and so on. These movements interface with one another. The idea of spirituality plays a significant role in connecting these different movements. What is in play here is the character of the idea of spirituality applicable across every social function.
- (5) Establishing Personal Identity through Developing the Idea of Spirituality: Similar to many counter-culture movements, the indigenous people's movements in Hawaii require of their participants an internal transformation. By joining the activism, the person finds a root of his/her personal identity in his/her private world, and simultaneously takes interests to the public world, that is, the social environment in which Hawaiian indigenous people live. Joining the movement can be a significant event for his/her personal life history. Here we can find public and private worlds interfere with each other.